

ハレバレモンスターSTORY

第1章

第12話 みんなの言葉

「テツ！間に合うか？」

「ギリギリってとこ、ってかプログラム打ってる時に話しかけないで」

「ヒタチくん、準備できたよ」

「こっちもい～よ～」

「よっしゃ！俺たちの気持ちぶちかまそうぜ」

—30分前—

『私はずっと待ってるって伝えたい』

「よし！そう来なくちゃ、今から行こうぜ！」

「待って、今から行っても到底間に合わない。この街から出るなら定期船一択。始発の時間には車を飛ばしても無理だ」

「ん～じゃあさ、花火みたいに空に言葉って書けないかな～・・・なんて」

「いや・・・いけるかもしれない」

「そうなの？アタシが言ってなんだけど花火って昼間じゃ見えないよ？」

「花火の部分じゃなくて、空に文字って方だよ」

「ドローンとカラスモークを使えばほんの一瞬だけど文字を書くことはできると思う」

「だったら迷ってる時間はないし、リィちゃんそれでやってみない？」

『みんな・・・うん』

「よっしゃ！じゃあ俺はドローン調達してくる。ホミさんとハルネはカラスモークを。テツどこでやる？」

「昨日の河原がいいと思う。そこなら自転車飛ばせば10分くらいで着くし。空も開けてる。」

「OKそうしよう。あとはなんかあるか？」

「時間としては30分以内。それ以上離れると船からも見えにくい。僕は先に行ってドローンのプログラム組んでるよ」

「ってことでリィはテツと一緒に先に行ってな」

『うん』

「・・・ねえリィ。リィは港に向かいなよ。」

『えっ・・・？』

「じっとしてられないでしょ。間に合わなくてもいいから思いっきり手ェ振ってきなよ。その後ろでアタシたちがおっきな花火あげるからさ。」

「花火じゃないけどな」

『ハルネ・・・ありがとう！みんなも！帰ってきたらいっぱいいっぱいありがとうって言うから！』

この1ヶ月の思い出が頭をよぎる。

楽しかったこと、笑いあったこと、からかいあったこと、たわいないお喋りでさえ思い出しては涙が溢れてくる。

”夏休みが終わらなければいいのに”ってあの時気づけば良かった。

1ヶ月もあったのに、終わってからなんてせずにすぐ行けばよかった。

後悔がとめどなく溢れてくる。いつもそうだ。取り返しがつかなくなっって初めて気づいてしまう。

みんな一緒になって、誰もいなくなっってほしくないって思っってたのに。

謝りたいこともいっぱいある、話したいことだっってまだまだある。

みんなと一緒にやりたいことも、行きたいところもたくさんある。

だから、だからー

”どーん”という花火のような音が街に響く。

遠くに見える船の後ろの人影がこっちを振り返った気がした。

私は大きく大きく手を振るんだ。私たちはここで待ってるからって。